

大学を拠点としたコミュニティダンスの実践 「札幌大学コミュニティダンスサークル ひつじ舞踊団」の活動事例から

柴田詠子

キーワード：大学 コミュニティダンス 生涯学習 地域貢献 ワークショップ

1. はじめに

近年、大学は「研究」や「教育」に次ぐ第三の役割として「地域貢献」の機能を担うようになり、全国各地の大学では様々な形で地域貢献が行われている。ここ数年では、「ダンス」を通じた地域貢献を行っている大学が現れてきた。ダンスは身体活動でありながらも、その多様性から各ライフステージに合わせた取り組みができることから、生涯学習としても注目されている。また、小・中学校の体育でダンスが必修化された影響でダンスが持つ教育的な側面も注目され始めている。大学でのダンスを通じた地域に対する活動の例としては、ダンス部に所属する学生が地域の子どもにダンスを教える、福祉施設でダンスを発表する、などのボランティア活動や、大学構内にダンススクールを設置する^{注1)}、大学主催のダンスイベントが行う、など様々な形で取り組まれている。

現在、札幌大学（以下、本学）でも地域貢献の一環としてコミュニティダンスの活動を行っている。2014年10月より、NPO法人札幌大学スポーツ文化総合型クラブ「めえ〜ず」（以下、「めえ〜ず」）^{注2)}内の講座の一つとして、地域住民にダンスの文化を普及することを目的として「札幌大学コミュニティダンスサークル ひつじ舞踊団」（以下、「ひつじ舞踊団」）の活動を開始した。

団体名称にも含まれているコミュニティダンスとは、現在のところの定義としてJCDNでは、「ダンス経験の有無、年齢、性別、障がいの有無に関わらず誰もがダンスを創り、踊ることができるという考えのもと、アーティストが関わり、“ダンスの持っている力”を地域の中で活かしていく活動」と指している。イギリスのコミュニティダンスから着想を経て、全

全国各地でコミュニティダンスを普及する活動が行われるようになり、教育・福祉・医療・地域活性化など様々な場面で「ダンスの力」が活かされるようになった。

「ひつじ舞踊団」では、コミュニティダンスの考え方をもとに、地域にダンス文化を普及すること、ダンスを通して交流を図り地域を活性化させることに重点を置き、特定のジャンルのダンスにこだわらず、様々なジャンルのダンスを活動に取り入れてきた。筆者が「団長」としてコーディネートをを行い、市内在住で活動しているダンサーの協力のもと、月1回2時間程度のダンスワークショップを行っている。これまで、社交ダンス・舞踏・サルサ・クラシックバレエ・日本舞踊など幅広いジャンルのダンスワークショップを行ってきた。参加者を固定せず、自分の興味・関心のあるテーマのワークショップに参加するため毎回の参加者は流動的ではあるが、徐々にダンスそのものに興味を持ちはじめたりピーターも増えてきており、様々なジャンルのダンスに挑戦している。

本稿では、これまでの「ひつじ舞踊団」の活動の実践報告を兼ねて、大学を拠点としたコミュニティダンスプログラムを提案し、生涯学習としてのダンスの可能性を探ることを目的とする。

2. 「札幌大学コミュニティダンスサークル ひつじ舞踊団」の活動

(1) 「札幌大学ダンスコミュニケーションラボ SCore (スコア)」の設置と札幌大学におけるダンスへの取り組み

本学では、2013年度からダンスを通じた地域貢献を開始した。2014年3月、「平成25年度私立大学等教育研究活性化設置整備事業」^{注3)}に採択され、学内に「札幌大学ダンスコミュニケーションラボ SCore (スコア)」(以下、SCore)が設置された。この施設は、「生涯学習型体育活動としてダンスを普及させる中心核」として設置され、保健体育教員を目指す学生を対象としたダンス講義の他に、ストリートダンス部と地域に住む児童を対象としたダンスプロジェクト「: SPADE」^{注4)}、障がいのある児童生徒(小学生～高校生)を対象とした「チャレンジダンス」など様々な取り組みが行われてきた。

(2) 「ひつじ舞踊団」発足までの経緯

SCore 内でのプログラム充実化を図り、当初は幼稚園児～高校生を対象としたストリートダンスのプログラム（ダンスプロジェクト「: SPADE」）を中心に展開していたが、幅広い層へのダンスの普及とストリートダンス以外のダンスを取り入れたプログラムの提供を目的とし、実験的に2014年10月～2月に計5回「ひつじ舞踊団」の活動を開始した。学内に設置しているNPO法人「めえ～ず」内の講座に組み込み、会員・非会員関わらず受講費500円で参加できるオープンプログラムとして開講した。^{注5)}

(3) プログラムの位置づけ

「ひつじ舞踊団」発足の際に、以下のようなコンセプトを設定した。

- ①受講者が幅広いジャンルのダンスを体験し、教養を深める機会を提供すること。
- ②初めてダンスに挑戦する人、ダンスに対して苦手意識のある人にとって参加しやすい環境を提供すること。
- ③地域や学内の人材を積極的に活用すること。
- ④受講者のダンスや身体表現に対する興味・関心を高めること。

これらのコンセプトが実現できるよう、プログラムを策定し、講師依頼を行っている。

(4) プログラム内容と開催時期と参加者数

2014年度のプログラム（2014年10月～2015年2月までの計5回）は、毎月第一土曜日の午前10時～12時に設定した。2015年度からは、参加者の希望に応じて平日開催も試みている。参加者人数については、初めの頃はなかなか参加者が集まらず、他のプログラムとの合同開催を行う形を取ることもあったが4回目以降は15名前後で安定してきた。（表1参照）

表1 これまで実施されたプログラム

実施日	講師	テーマと内容	参加人数
2014年 10月4日(土)	柴田 詠子	テーマ：J-POPダンス 内容：近藤真彦の「ギンギラギンにさりげなく」に合わせた振り付けを覚え、最後はフォーメーションをつけてグループダンスを行った。	5名
2014年 11月8日(土)	ビルヂング	テーマ：キッズダンス 内容：最初はからだあそびから始まり、最後に簡単な振り付けダンスにチャレンジした。	44名
2014年 12月6日(土)	東海林靖志	テーマ：即興ダンス 内容：「お名前ダンス」で全身を使って自分の名前を表現した。	11名
2015年 1月10日(土)	田仲 ハル	テーマ：舞踏 内容：前半は貴重な映像資料を見ながら、舞踏の歴史について学び、後半は「舞踏譜」を体験した。	20名
2015年 2月7日(土)	三浦 正記(本学学生) 早川 舞	テーマ：ペアダンス(社交ダンス) 内容：社交ダンス経験者が多かったため、初心者グループと経験者グループの2展開で行った。ワルツとルンバの基本的なステップを習い、組み合わせた振り付けを踊った。	17名
2015年 5月9日(土)	Anna / 新田 昌弘	テーマ：津軽三味線と日本舞踊 内容：前半は津軽三味線の演奏を聴き、実際に参加者で演奏体験を行った。後半は民謡舞踊の「こきりこ節」を踊った。	15名
2015年 6月5日(金)	今 美子	テーマ：サルサ 内容：サルサの基本ステップを覚え、組み合わせた振り付けを踊った。	14名
2015年 7月25日(土)	koquito	テーマ：パチャータ 内容：リズムに合わせてウォーミングアップを行い、基本ステップを覚え、組み合わせた振り付けを踊った。	19名
2015年 8月3日(月)	藤沢 弘子 協力：西岡音頭普及会	テーマ：西岡音頭 内容：西岡音頭と北海盆唄、子ども盆おどり唄の振り付けを覚えた。	32名
2015年 9月2日(水)	向井 章人	テーマ：コンテンポラリーダンス 内容：前半はストレッチや筋トレなど身体の基本的な使い方を学び、後半は振り付けされたコンテンポラリーダンスに挑戦した。	13名
2015年 11月7日(土)	田口 玲	テーマ：クラシックバレエ 内容：前半はクラシックバレエの歴史を学び、後半はバレエと振り付けレパトリーを踊った。	18名

のWSは「チャレンジダンス」のプログラムと合同の開催となった。

(5) スタッフと学生ボランティアの参加

ワークショップの企画・運営は団長（筆者）と「めえ〜ず」の運営スタッフがやっている。団長は、当日は参加者の一員としてワークショップに参加し、環境整備や進行アシスタントも行っている。

当日の受付業務や記録などの運営に本学の学生ボランティアの参加もある。地域創生専攻の学生が講義やゼミ活動の一環として参加したり、女子バスケットボール部の部員がトレーニングの一環として参加したりした。また、ストリートダンス部 :SPADE の学生はダンスの勉強の場として、興味のあるテーマのワークショップに参加しながら運営を手伝い、地域住民との交流を図っている。

(6) 広報活動

プログラムの広報は地域町内会の回覧板の利用と Facebook ページを中心に行っている。月初めに「ひつじ舞踊団」のフライヤーを作成し、「めえ〜ず」内の講座の案内と一緒に回覧板に折り込みしている。Facebook ページでは、大学周辺地域以外への広報活動として、プログラムの案内と活動報告を随時行っている。また、大学のプレスリリースへの掲載や、西岡まちづくりセンターにも宣伝協力を得ている。(図 1、図 2 参照)

図1 「ひつじ舞踊団」活動案内フライヤー



2015年1月 舞踏



2015年2月 ペアダンス



2015年5月
津軽三味線と日本舞踊



2015年6月 サルサ



2015年7月 バチャータ



2015年9月
コンテンポラリーダンス



2015年11月
クラシックバレエ

図2 「ひつじ舞踊団」Facebookページ



(7) ワークショップの内容

ワークショップの内容は、基本的には前半、後半の2展開で行っている。ワークショップの時間は毎回2時間で、前半1時間は「今日行うダンスはどのようなダンスなのか」という導入を行う。そのダンスが成立した歴史的背景や実際に踊っている映像などDVD資料を使って紹介したり、グループワークや簡単なステップを練習したりするアイスブレイクの時間となっている。後半1時間は実践的な内容に挑戦する時間となっている。また、ワークショップの最後には参加した感想や気づきをみんなでシェアしている。

2015年5月に開催された「津軽三味線と日本舞踊」のワークショップでは、前半は津軽三味線のワークショップ、後半は日本舞踊のワークショップを行い、最後は津軽三味線の生演奏に合わせて、日本舞踊を踊った。(表2参照)

表2 ワークショップの展開

	(例1) 2015年5月9日(土) 津軽三味線と日本舞踊WS 講師: Anna / 新田昌弘 参加者: 15名	(例2) 2015年11月7日(土) クラシックバレエWS 講師: 田口 玲 参加者: 18名
展開	津軽三味線の紹介と演奏会(40分) 津軽三味線の歴史や楽器の造りについて説明し、実際に津軽三味線の名曲を講師が演奏した。	クラシックバレエの紹介(30分) バレエの歴史や有名な作品を本やDVDを使って紹介。また、バレエに関する疑問などをわかりやすく解説。(例) トゥ・シューズの構造など実物を使用して説明した。
展開	津軽三味線演奏体験(20分) 津軽三味線の奏法を習い、実際に音を出して、簡単な演奏を体験した。	バレエに挑戦(30分) バレエの基本である足やアームス(腕)のポジションを理解し、プリエやタンデュなど簡単なバレエを体験した。
展開	日本舞踊の基本動作(20分) 日本舞踊のお辞儀の仕方や、すり足など基本的な動作や手を桜の花びらが散るようにヒラヒラ動かす情緒的な動きを習い、練習した。	レパートリーに挑戦(40分) 「くるみ割り人形」の「トレバック(ロシアの踊り)」を簡単にアレンジした振付に挑戦。2グループに分け、ペアで組んだ動きや、配置をつけた構成で踊り、最後に練習の成果を発表し、お互いのグループのダンスを鑑賞した。
展開	民謡舞踊「こきりこ節」に挑戦(30分) 講師手作りの「あや棒」を両手に持って、「こきりこ節」の振り付けを覚え、最後は津軽三味線の生演奏に合わせて踊った。	ビデオ鑑賞&感想シェア(10分) 発表を撮影したビデオを全員で鑑賞。WS内で印象に残ったことや、実際に踊ってみた感想など一人ずつコメントした。

休憩時間は決まっておらず、進行状況に応じて適宜取っている。

(8) 参加者アンケートの実施

ワークショップ実施後、毎回参加者アンケートを実施している。ワークショップの感想や、次回以降実施してほしいプログラムの希望を記入してもらっている。ここで、参加者のデータやニーズの調査を行い、参加者の要望に応じたプログラムを活動に取り入れている。

(9) メディアからの注目

大学を拠点とした地域住民向けのダンスプログラムの発信は各メディアからも注目を浴びた。これまで、テレビ・ラジオ・新聞・フリーペーパーなどの各媒体で活動の様子が取り上げられた。(表3、図3参照)

表3 これまでに掲載されたメディアの媒体

時期	媒体名	発行元
2015年3月	若いチカラを地域につなげるマガジン (フリーペーパー)	札幌市市民まちづくり局 市民自治推進課
2015年7月3日	北海道新聞夕刊「きらきらスポーツ」(新聞)	北海道新聞社
2015年7月21日	「キラキラ」(テレビ番組)	HTB(北海道テレビ)
2015年10月10日	「ウィークエンドバラエティ日高悟郎ショー」 (ラジオ番組)	STVラジオ

図3 「北海道新聞」2015年7月3日(金) 夕刊掲載記事



(10) 「西岡音頭普及会」との連携

「西岡音頭」とは、本学の位置する札幌市西岡地区の踊りとして地域住民に親しまれている踊りである。西岡地区町内連合会の創立 30 周年記念事業の一環として、昭和 52 年に創られた「西岡音頭」の音源を現代風アレンジした曲に、西岡在住の舞踊家・藤沢弘子氏が振付を加え、地域住民に普及するために「西岡音頭普及会」が結成された。会の活動としては、月 1 回の講習会、盆踊り大会や地区センターのお祭りで踊りを披露するほか、病院やデイサービスでの活動、小中学校で講習会を行ったりしている。

2015 年 8 月の活動では、この「西岡音頭」を取り入れ、西岡地区の住民以外の方にも西岡音頭を知ってもらうために「西岡音頭普及会」の方々の協力のもと、参加費無料でのワークショップを開催した。開催時期が盆踊りシーズンだったので、併せて「北海盆唄」と「子ども盆おどり唄」の振付伝達も行った。この活動に興味を持ち、その後「西岡音頭普及会」のメンバーになった参加者もいたり、普及会のメンバーが「ひつじ舞踊団」のワークショップに参加するようになったりと、双方にとって良い交流の機会となった。

その後も「西岡音頭普及会」とは連携を図り、2015 年 10 月に開催された「めえ〜ず」の作品発表会ではゲストパフォーマンスで「西岡音頭」を披露してくれた。(図 4 参照)

図 4 「めえ〜ず」作品発表会でのパフォーマンスの様子



3 . 参加者アンケートの実施

ワークショップ実施後に毎回参加者にプログラムについてのアンケート調査を実施している。質問内容は年齢、性別、住んでいる地域、参加した目的、今後取り入れてほしいダンス、講座の感想の5項目である。アンケート記入は任意での実施で、参加者131名のうち78名から回答を得た。^{注6)}

(1) 年齢・性別・住んでいる地域

これまで「ひつじ舞踊団」のプログラムには6歳～85歳と幅広い年齢層の人々が参加した。中でも、60代の参加者の数が一番多く、次いで50代と20代が多かった。20代は本学の学生が参加しているため、参加人数が多かった。男女比では、男性が36%、女性が64%と女性の比率が高かったが、ペアダンスやサルサなど男女のペアで踊るワークショップでは、男性の参加が目立った。住んでいる地域の割合では、本学の位置する豊平区からの参加が半数以上を占めていたが、メディアから情報が区外にも伝わり、区外・市外からの参加者も増えた。また、リピーターの参加者数は18名で、多くて5～6回ワークショップに参加している人もいる。

図5 参加者年齢別割合

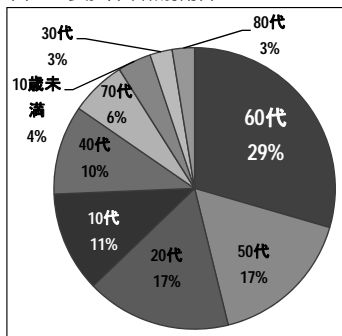
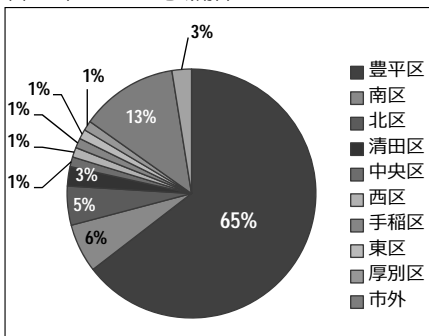


図6 住んでいる地域割合



(2) 参加目的

参加目的は自由記述で、共通の言葉を含む内容で分類した。最も多かった項目は「講師・内容に興味がある」という意見だった。参加者の中には、昔やっていたダンスをもう一度やってみたい、いつも自分がやっているダンスとは違うダンスに挑戦してみたい、というダンス経験者も多くいた。次いで多かったのは「運動不足解消」という項目だった。この項目は主婦層の意見が多く、ダンスは音楽のリズムによって楽しく運動できる、シェイプアップ効果がある、など気軽に参加できるイメージがあることが推測される。一番参加者が多かった60代の参加者の意見では、「楽しそうだから」「勉強のため」「ダンスが好きだから」「踊りたいから」「ダンスに興味がある」という意見が多かった。このことからわかるのは、60年代の参加者はダンスへの興味・関心が高いということがわかる。

また、リピーターの参加者からは、「毎回楽しみである」「ダンスが好きだから」という意見があった。毎回違うテーマでワークショップを実施しているにも関わらず、リピーターが増えてきている要因を考えると、ワークショップに参加してみて、ダンスそのものに魅力を感じ、色々なダンスを知って踊りたいという好奇心が強い参加者が、リピーターとしてワークショップに参加しているということが言えるだろう。(図7参照)

(3) 今後取り入れてほしいダンス

この項目は自由記述で回答してもらった。一番人気だったのは「クラシックバレエ」で、次いで「社交ダンス」「中高年向けのヒップホップ」という回答だった。「その他」の項目では、フラダンス、アルゼンチンタンゴ、インド舞踊、フラメンコなどの民族舞踊の回答が多かった。(図8参照)

図7 参加目的

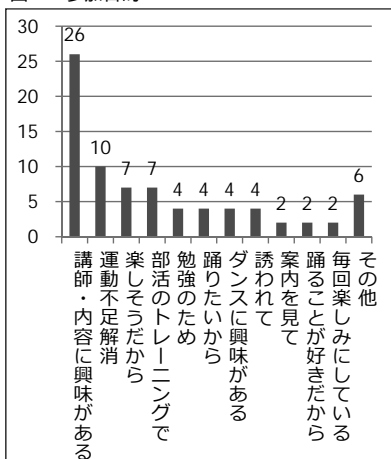
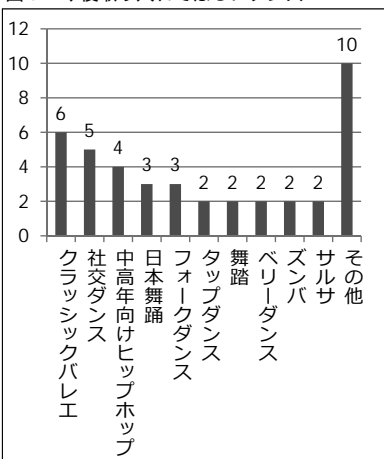


図8 今後取り入れてほしいダンス



(4) ワークショップ受講の感想

これまで行ってきたワークショップ別に参加者の受講後の感想をいくつか紹介する。

「J-POP ダンス」講師 柴田詠子

- ・ふりつけを覚えるのが大変だったけど、とても楽しかったです。(8歳女性/小学生)
- ・普段グループでダンスすることがないので楽しかったです。いつもと違う筋肉を使えたので、体が楽になりました。(25歳女性/アルバイト)

「即興ダンス」講師 東海林靖志

- ・いろんな年代の方とダンスができて楽しかったです。それぞれの表現がみえて面白かった。(39歳女性/会社員)
- ・自由で楽しかったです。(84歳女性/主婦)

「舞踏」講師：田仲ハル

- ・思っていたダンスと違ってとまどいもありましたが、とてもいい経験になりました。(21歳女性/大学生)
- ・アングラ世代として懐かしく、楽しかった。(61歳男性/無職)

「ベアドンス」講師：三浦正記 / 早川舞

- ・初心者にも丁寧に教えてくださって、良かったです。第2回があれば参加したいと思いました。(29歳女性/大学職員)
- ・ワルツは昔少し踊ったことがあります、ルンバは初めてでした。とても難しかったです。でも、とても楽しかったです。(55歳女性/栄養士)

「津軽三味線と日本舞踊」講師：Anna/ 新田昌弘

- ・とても楽しく、初めての経験ができました。(65歳女性/社会体育指導)
- ・新鮮な刺激を受けました。(73歳女性/無職)

「サルサ」講師：今美子

- ・楽しかった。また参加したい。(66歳男性/無職)
- ・とても楽しかった。ベーシックのステップでも組み合わせることで豊かに表現できることが素晴らしいです。一曲踊ることで満足感がありました。(62歳女性/スポーツ推進委員)

「バチャータ」講師：koquito

- ・音楽に合わせるのが難しかったけど、わかりやすく教えてもらいました。(49歳男性/大学事務)
- ・楽しくて、めっちゃめっちゃ気持ちよかった！試験勉強のストレス発散になった。(21歳男性/大学生)

「コンテンポラリーダンス」講師：向井章人

- ・未知の世界の体験ができました。冷や汗がダラダラ出ました。(59歳女性)
- ・難解なイメージがありましたが、とても親しみやすい動きから教えていただき、とても楽しかったです。(61歳女性)

「クラシックバレエ」

- ・講師の先生がやさしく説明してくださったので、バレエの基本動作が良くわかった。(62歳男性/無職)
- ・バーレソンなど丁寧に教えてもらえて良かったです。(16歳女性/高校生)

参加者の感想に共通することは、初心者・経験者に限らず、ダンスを通じて日常生活では体験することのない刺激を得たという点である。ダンスのワークショップに初めて参加した人でも、導入から丁寧に教えてもらえることで、抵抗なくダンスを楽しんで参加できた人が多かったという印象である。ダンススクールや連続の講座では、長年継続している中にいきなり初心者が入りにくいというイメージを持っている人が多いが、「ひつじ舞踊団」のワークショップは毎回異なるジャンルのダンスを体験するための入口として設定しているので、初めてでも参加しやすい内容である。また参加者の年齢層も幅広く、ダンス経験の制限もないので、クラス内でのヒラエルキーができにくく、誰もが平等に参加できるというメリットがあると考えられる。

4. まとめ

(1) 大学を拠点とするメリット

「ひつじ舞踊団」は大学を拠点とした全国でも珍しいコミュニティダンスサークルである。大学を拠点とし、学内の施設を利用することで、比較的安い参加費でプログラムが継続的に実施できるというメリットや、安心して参加しやすいという参加者にとっても心理的なメリットが生まれる。また、このようなプログラムに学生が参加することで、学生にとっても多世代の多様な方々と交流できる良い機会となる。一般の参加者と活動することで、普段学生として授業を受けているときとは違う視点をもって活動を楽しむことができる。

(2) 今後の活動の方向性と課題

今後の活動の方向性としては、コミュニティダンスの持つ「創造性」をより深め、これまでのワークショップの経験を活かして、作品を創作して発表する場を設けることが次の課題であると考えられる。ワークショップとは、もともとは「工房」という意味があり、ものづくりの現場で使われてきた言葉である。現在は「創る」ことを目的とした「学び」の形式として使われてきている。これまでの活動はダンスに興味・関心をもってもらうこと

を目的に、様々なダンスを体験し、ダンスの楽しさを発見していくという「学び」の段階であった。次の段階として、「創る」側面に焦点を置き、作品を創って発表する体験の中で、参加者がどのような反応をするのか、その変化の様子を追跡していきたい。

また、地域にダンス文化を普及していくには、ダンス作品を鑑賞することも重要な要素となる。松本（1982）は舞踊鑑賞の価値について、「すぐれた作品に接することは、義向上の巧みさへの開眼とともに、作品を通して受けた感動は、人々のうちに深くひびいて、人生に、永続的な価値を求める感情を高める契機となる。したがって、舞踊の特性から考え、すぐれた作品の鑑賞の機会をもつことは、創作と同等に重要なことと考えられるだろう」と述べている。自らダンスを踊るだけでなく、ダンスを見て学ぶ機会も設け、地域住民の生活にダンスがより身近なものとして感じられるようなプログラムを検討することが必要だと考える。

（3）生涯学習としてのダンスの可能性

「ひつじ舞踊団」の参加者の年齢層が4歳～85歳と幅広いことからわかるように、ダンスは生涯学習として、いつでも誰でも学べる取り組みである。生涯学習社会とダンスの内在的価値について、三浦、矢島（1992）は「学校から離れてから、ダンスを生活に取り入れるのは、全くの自由意思による。また、どんなダンスを選択するかも、どのようなやり方をするかも自由である。こうした、全く拘束のない中でダンスを生活に取り入れるのは、ダンス独自の面白さ（内在的価値）がその原点となろう。」と述べている。ここで言う“内在的価値”とは、「リズムカルな動きの連続」とい表現方法を用いて、「模倣・変身の欲求を充足」することであり、それはすべてのダンスに共通して言えることである。参加者のアンケートからもわかるように、参加者は様々な目的を持ってワークショップに参加している。健康維持やダイエットのため、教養を深めるため、周りの人とのコミュニケーションを楽しむため、など様々であるが、これらの目的を果たすための手段としてなぜダンスが選ばれるかという点、ダンスそのものには楽しみや価値を見出しているからだと考えられる。また、ダンスと一言に言っても、

その種類は多種多様で、世界中のあらゆる場所で、その時代のニーズに応じて様々なダンスが発祥している。その多種多様な舞踊文化から、自らのライフサイクルに合うものを選択し、生涯を通じてダンスを生活の一部として取り入れることができる。

このようなダンスの特性を捉え、今後も「ひつじ舞踊団」の活動を通じて、充実したプログラムを展開し、幅広い層の人々がダンスライフを楽しめる環境を提供していき、地域のダンス文化を育てていきたいと筆者は考える。

[注]

- 1) 大学構内に設置されたダンススクールの事例として、法政大学多摩キャンパスダンススクール、NPO法人郡大クラブキッズダンス教室などの取り組みが報告されている。
- 2) 2009年度より、札幌大学・札幌大学女子短期大学の敷地内に設置。両校を「地域と共生・協働する学校」として更に発展させるべく、地域貢献事業として「めえ〜ず」を立ち上げた。大学構内の空き教室を利用し、ヨガ教室や料理教室などの講座を行っている。
- 3) 私立大学が建学の精神と特色を生かした人材教育機能を発揮し、及び大学間連携を進め、社会の期待に十分に答える教育研究を強化し、進展させ、私立大学等の教育改革のこれまで以上の新たな展開を図るため、基盤となる教育研究設備を整備することを目的としている。
- 4) 2013年4月に発足。地域子どもたち（幼稚園児～中学生）を対象にしたストリートダンススクールを学内で展開している。会員は現在約70名が在籍している。
- 5) 通常の「めえ〜ず」のプログラムは、年会費のみの支払いで講座を受講できるシステムとなっている。
- 6) 第2回「キッズダンス」と第9回「西岡音頭」は合同企画のためアンケート調査は実施していない。また、この2つのワークショップは参加料無料で開催している。

引用文献

- 1 NPO 法人ジャパン・コンテンポラリー・ダンス・ネットワーク ホームページの [コミュニティダンス] の項より引用 <http://www.jcdn.org/site0000/about/activity.html> (2016年1月5日閲覧)
- 2 松本千代栄編著 (1982)『ダンス・表現 学習指導全書』第3版 大修館書店：東京, p. 99
- 3 三浦弓杖, 矢島ますみ (1992)「舞踊教育再構築 (I) 日本における舞踊教育の可能性ーダンスの特性の視点からー」千葉大学教育学部研究紀要. 第2部 Vol. 40, p. 115

参考文献

- 1 増山尚美 (2003)「コミュニティ・ダンス・ワークショップにみる生涯学習社会における学習形態について」北海道浅井学園大学生涯学習研究所研究紀要『生涯学習研究と実践』第4号, pp123-133
- 2 高橋美穂子 (2013)「総合型地域スポーツクラブの取り組みーNPO 法人群大クラブキッズダンス教室を例としてー」白鷗大学教育学部論集, pp. 433-452
- 3 越部清美 (2014)「舞踊文化と地域貢献に関する基礎的研究ー法政大学多摩キャンパスダンススクールの活動からー」法政大学スポーツ研究センター紀要 32, pp55-63
- 4 片岡康子編著 (1991)『舞踊学講義』大修館書店, pp. 142-151

謝辞

本原稿を掲載するにあたり、札幌大学 瀧元誠樹教授、北翔大学 増山尚美教授よりご指導いただきました。深く感謝しています。

また、本企画の趣旨にご理解いただき、ご協力くださいました講師の皆様にも大変感謝しています。

そして、「ひつじ舞踊団」の活動に参加してくださいました地域住民の皆様にも感謝しています。ありがとうございました。